

京都府農林水産技術センターについて

(公財) 日本豆類協会

平成28年度に実施した第4回小豆試験研究情報交換会（日本豆類協会主催）の開催場所である「京都府農林水産技術センター」は、京菓子にはなくてはならない原材料である「丹波大納言小豆」と呼ばれる大納言小豆品種の育成や栽培技術の試験研究を実施する京都府の公設試験研究機関です。

ここでは京都府の地域特産である「丹波大納言小豆」の研究を実施する京都府農林水産技術センターについて紹介します。

1. 組織概要

京都府農林水産技術センターは、農業・林業・畜産業・水産業の各々の部門にまたがる研究課題に対して迅速に対応していくため、平成21年4月に各研究所を統合して発足した。

京都府農林水産技術センターは、4つの研究部門センター（農林・生物資源研究・畜産・海洋）を有しており、小豆の研究については亀岡市の農林センターと精華町の生物資源センターで取り組まれている。

農林センターの小豆研究は栽培が主体であり、気象変動に対応した安定生産や省力生産技術の研究を実施している。また、関

西文化学術研究都市の南田辺・狛田地区に設置されている生物資源研究センターでは、バイオテクノロジーを生かした大納言小豆の新品種の開発を実施している。

2. 小豆の研究概要

京都府農林水産技術センターで、重要な地域特産の「丹波大納言小豆」を専門的に支える研究者は1～2名に過ぎない。特に育種に関しては、酒米や枝豆等の他の京都特産作物の育種を担当する研究者が兼務しているのが実情である。

一方、伝統を重んじる京都の和菓子屋等の実需者の要望にかなった研究成果を出すのは、研究者にとってはなかなか大変なようであり、日頃から実需者とのコミュニケーションを親密に図るよう努めているとのことであった。

1) 京都府農林水産技術センター農林センターの小豆に関する研究概要

京都府の小豆生産者も他の産地と同様に高齢化が進み、労力のかかる小豆生産を維持していくのが大変厳しい状況となっている。そこで京都府では、平成18年ごろか



農林センター研究棟



生物資源研究センター研究棟



農林センターほ場



生物資源研究センター選抜ほ場

ら集落型法人を中心に小豆の大型機械化体系を導入し、現在では約50集団で200haを栽培し、なんとか生産量の減少に歯止めをかけているところである。

農林センターでは、小豆大規模機械化栽培体系の確立を目指して、コンバイン収穫に対応した、①出荷調整法の確立と未利用小豆の有効利用法の確立、②排水対策と除草体系の確立、といった研究課題に取り組んできた。なお、平成30年度からは、有効な登録除草剤のない難防除外来雑草の発生拡大に対する対策を検討している。

2) 京都府農林水産技術センター生物資源研究センターの小豆に関する研究概要

当センターは、平成9年4月に関西文化学術研究都市の南田辺・狛田地区に設置されており、京都府立大学農学部（現生命環

境学部）と京都府農林水産部の連携の下に、農林水産資源に関する高度な研究開発を行う、大学と行政機関が一体化した最先端のバイオテクノロジーを積極的に活用する研究機関である。

現在は、在来品種の「丹波大納言」を純系選抜して品種化した「京都大納言」を活用して、機械収穫適性、ウイルス病抵抗性、優れた加工性、表型子実形状等の形質獲得を目指し、DNAマーカー等バイオテクノロジーを積極的に活用して育種を進めている。

なお、京都府の小豆の主産地は亀岡市周辺であることから、新品種育成のための現地栽培試験は農林センターで実施している。